

Denglisch の危険性

——ドイツ語の現状について——

Gudrun GRAEWE

Abstract

Mehr als andere europäische Sprachen wird Deutsch seit einigen Jahrzehnten von Anglizismen und Amerikanismen überschwemmt. Manche werden wertend „Denglisch“ genannt. Von „Denglisch“ spricht man zum Beispiel dann, wenn englische Verben oder Adjektive in die deutsche Sprache übernommen werden, obwohl es adäquate deutsche Wörter gibt. Einige Sprachkritiker und Linguisten sehen durch diese Entwicklung die deutsche Sprache in Gefahr. Andere vertreten die Meinung, die Etablierung des Englischen als einzige Arbeits- und Standardsprache in Europa sei ein erstrebenswertes Ziel. Denjenigen, die für den Schutz des Deutschen eintreten, wird oft Fremdenfeindlichkeit vorgeworfen. Woran liegt es, dass deutsche Muttersprachler so bereitwillig englische Wörter in ihr Vokabular aufnehmen? Warum ist die Diskussion um dieses Thema so stark emotional belastet? Diese Fragen sollen hier untersucht werden.

Keywords : 外国語の侵入, 言語政策, Denglisch, Anglizismus, Amerikanismus

はじめに

近年日本語は、カタカナ語が使われすぎ、分かりにくくなった、という批判が増えている。カタカナ語は多くの場合、英語の単語から派生したものである。カタカナで表記される外来語が溢れると、日本語を含めて言語が乱れたりコミュニケーションの障害になったりする、という批判は大きくなった。

ドイツ語の場合にも以前から、英語の単語が使われていた。第2次世界大戦後はその数がさらに増えた。ドイツ人は英語の単語が役立つ、流行である、独創的であると考え、それを熱狂的に受け入れた。しかし、1980年代から英語の流入は増加する傾向を見せた。それ故に、これほど多くの英語の単語が本当に必要なのか、という疑問が頻繁に浮かび上がってくるようになった。

このように、英語は様々な言語へ影響を与え、その影響が近年急増したと言えよう。その現象の背景にはどのような理由があるのか。それはグローバリゼーションと深く関連しているのであるが、さらに他の原因についても言及する。

ここではドイツ語の中の英語を中心に考察する。また、他の言語とも比較しながらドイツ語の現状に焦点を合わせる。ドイツ語圏や他の言語圏の場合、英語の影響はどのように評価され

ているか、どのような反応を引き起こしているか、などについても考察する。比較対象となる他言語としてはフランス語と日本語である。この二つの言語を比較の対象とした理由は、フランス語の場合ドイツ語と異なって、フランス語保護政策として、法律が制定されたからである。このような政策はドイツ語圏では見られない。同じヨーロッパの国同士でありながら、何故そのような差異が生じるのであろうか。そして、日本語の場合には英語の流入から守るための保護政策が存在していない。日本語はドイツ語やフランス語と違って、英語と異なる言語族に属する言語であるので、その状況を比較する意義がある。

さらに、ドイツ語圏における英語流入に賛成、反対の二つの相対立する論拠を幾つか紹介する。その議論はかならずしも冷静な、客観的なものではなく感情的な論が多い。

まずはドイツ語の中の英語の実態に注目する。英語の影響はどのような形で、どこに現れているのか。その影響に対する意見の賛否の幾つかの論証を紹介する。英語の影響はドイツ語を危険にさらしているのか、もしくはドイツ語に新しい方向へのチャンスを与えているのか。また、言語政策は英語の影響力に対してどのような課題を遂行すべきか、何故ドイツ語の場合他の国と比べて状況が特別なのか、などのような問題を取り上げる。最後に、英語のドイツ語への影響はドイツ語の学習者の勉強意欲にどのような効果があるのか、について考察する。

Denglisch とは何か

Denglisch というのは何か。それは、二つのことばの複合語であり、Englisch（英語）ということばが含まれていることが明白である。ことばの最初についている「D」はDeutsch（ドイツ語）の第一文字である。この概念は、20、30年前前から英語の強い影響下に形成されたドイツ語の一形を指している。Denglisch とは、英語のことばや表現が組み入れられたり、英語の文法構造を借用したりする混成語のことである。

ドイツでは言語学者をはじめ、様々なメディアや団体が英語やアメリカ英語の現代ドイツ語への影響というテーマについて議論している。それは基本的に問題点の多い影響であるとされている。Denglisch というのは大体、軽蔑的な概念である。その概念を使う者はそれによって、英語のドイツ語への影響を望ましくない侵入であることを示唆している。

英語からドイツ語に流入したことばは一般的に Anglizismus（イギリス英語風の慣用語法）または Amerikanismus（アメリカ英語風の慣用語法）と呼ばれている。それは多くは名詞（例：E-mail）、名詞化された動詞（Stalker）や英語からそのまま訳された慣用句（例：auf Deutsch の代わりに in Deutsch）である。それでは Anglizismus または Amerikanismus と Denglisch とにはどのような違いがあるだろうか。言語学などの文献では両方の概念が使われているが、はっきりと定義した上で区別している文献は稀である。一般的に言えば、Anglizismus や Amerikanismus は英語から入ってきたことばや慣用句を指しているが、Denglisch とはその語や慣用句が多く使われている言語形を指している。Anglizismus や Amerikanismus という概念は中立性があり、価値判断を伴わない。それは客観的な基準で決定することができる。しかし Denglisch というのは言語評論から生まれた、評価的な概念である。科学的な基準で決定することができない。ドイツ語のある現象を Denglisch と名づけることは主観的な判断である。従って、

Denglischという概念の定義は様々である。例えば、同じ意味でまったく同じ事情を表現できる適当なドイツ語の語（動詞や形容詞）があるにもかかわらず、ドイツ語の中で英語の動詞や形容詞が使われることをDenglischと呼ぶ者がいる。例えば、ダウンロード（英語：download）ということばはドイツ語で「herunterladen」という動詞で表現できるのに、「downloaden」という動詞を使うことがしばしばDenglischと呼ばれる。

ドイツ語の中の外来語 — その歴史

ドイツ語を使う人々は外来語に対して敵対的なのか、あるいは友好的なのか。両方の主張は正当である。ドイツ語の歴史を見れば、外国語に対して排外的な時期も友好的な時期もあった。

現在のドイツ人が自分の言語に対して客観的な態度をとることは困難であると思われる。それはドイツ語の排外的側面による反応である。一般に、ドイツ語の外国語排斥の絶頂はナチ政権の時期にあったと思われる。後述するように、それは言語政策にも影響を与える誤解である。ドイツ語など、ドイツ固有の物を維持すべきかどうか、というテーマを取り上げようとするだけでも、ドイツかぶれである、誇張したドイツ風の考え方があるという批判にさらされることが多い。従って、ドイツ語を外国語の流入から守るべきであるという意見を持っている者は国粋主義的、更にはナチス思想的動機があると誹謗中傷の槍玉に挙げられることがある。周知のように、ドイツ人はドイツの歴史遺産であるナチ政権の時期に関して神経過敏である。それはドイツ人の自分の言語に対する態度にも、言語政策にも反映されている。ドイツでドイツ語を外来語や他の言語の影響や流入から守る言語政策が殆ど存在していない理由はそこにある。

ドイツではすでに17世紀から、外から流入してきた外来語をなるべくドイツ語に翻訳しようとする動きが見られた。しかし、その時代に排外的・民族主義的動機があったという仮定は殆どの場合、不適切である。多くの国語浄化論者は外国のものに対する敵意もなければ、ドイツ語が他の言語を凌駕しているという信念もなかった。優越感どころか、他のヨーロッパの様々な言語に対する劣等感があった。それは、隣の国々の学者たちが討論している多くの対象に、相当するドイツ語の単語が存在しなかったからである。

外来語をドイツ語に訳そうとするための、もう一つの動機は分かりやすさであった。国語浄化論者は分かりにくい外来語の使用に賛成できなかった。外来語を聞いて、ただちに理解できる人は全人口の内、一部しか存在していなかった。したがって、外来語の使用によって言語障壁が生じたので、外来語に相当するドイツ語のことばを見つけることが目標であった。その背景に言語は人々を分離するのではなく、結ぶためにある、という考えがあった¹⁾。

外来語からドイツ語を守ろうとするのはドイツかぶれやナチス思想の証明になるという考え方には根拠がない。ドイツ語を浄化しようとする運動はナチス時代よりはるかに以前から発起された。1885年にAllgemeiner Deutscher Sprachverein（全般ドイツ言語協会、略ADSV）という協会が組織された。それはドイツ国家主義的思想を持ったクラブであった。そのクラブの意図は、フランス語、ラテン語、ギリシア語、そして後に増えてきた英語から流入した外来語をなるべく排斥すること、そしてドイツ語の言葉で表現できる物事を外来語ではなく、かならずドイツ語の言葉で表現することの促進であった。

ナチスの権力掌握はその目的に好条件を与えると期待して、ADSVがナチスに取り入ろうとした。しかし、ナチスは数多く外来語を利用し、その外来語に固執した。ADSVはナチスに、その外来語の利用を排除するように提案したが、ナチスにとってそれは厄介な願い事であった。

ナチスは好んで外来語を利用していった。例えば「Autorität (権威)」、「Garant (保証人)」、「fanatisch (狂信的)」、「Mission (使命)」、「Propaganda (宣伝)」など²⁾。このように、ナチス政権では宣伝相を「Werbeminister」ではなく(ドイツ語で「Werbung」は宣伝を意味する)、ラテン語の「Propaganda」を優先して「Propagandaminister」と呼んだ。ナチスはドイツ語の純粹さにはこだわらず、ドイツの国民がゲルマン語に由来することばかり使わない、ということまで必要としなかった。国粹主義は言語まで及ばなかったのである。

ヒトラー自身は国語浄化論者を軽蔑し、『わが闘争』の中で、現代にまったく合わない古ゲルマンのことばをやたらに使うのは国粹的でないと強調した。1940年の総統命令で「総統はこのような強制的なドイツ語化を望まない」³⁾とした。つまり外国語の排除を止めようとしたのは民主主義的になった戦後ドイツの代表者でなく、他ならぬヒトラーであった。

それにもかかわらず、ナチス思想や国語浄化論の思想の背景にはほぼ同じ考え方が根底にある。ADSVの会員はナチ党の支持者であった。彼らはナチスの権力掌握を歓迎し、ナチスに彼らの活動への協力を得ようとしたが無駄であった。

ドイツは外来語を使う伝統が長い。ヨーロッパの古典時代はラテン語とギリシア語(ラテン語は中世まで)が、啓蒙主義時代はフランス語が共通語(Lingua franca)の役割を果たしていた。それらの言語は共通語として、母語が異なる人々の間で意思伝達のために使われていた。時代が進むにつれて、ドイツ語にギリシア語・ラテン語やフランス語のことばが多く流入した。17, 18世紀にはフランス語から多くのことばがドイツ語に取り入れられた。そのため、郵便事業や鉄道関係、軍事関係の多数の専門用語はフランス語からの輸入であった。例えば、封筒は「Couvert」といい、乗車券は「Billet」、車両は「Waggon」、車掌は「Kontrollleur」、大隊は「Bataillon」など、フランス語の専門用語が一般に使われていた。

1874年に、郵便局長であったHeinrich von Stephan (1831 - 1897)は760ぐらいのフランス語からの外来語をドイツ語の用語に置き換えることを命じた。その動機は外国や外来語に対する憎しみではなかった。Von Stephanは万国郵便連合の設立によって、世界郵便規則の規格化を促進しただけでなく、郵便組織の改革や改新によって現代的なサービス業施設を確立した。そのために、郵便専門用語をフランス語から分かりやすいドイツ語に代えたと思われる。それは今日までのドイツの歴史の中で唯一の国家によるドイツ語化活動であった⁴⁾。例えば郵便為替は「Postmandat」から「Postanweisung」に、局留めは「poste restante」から「postlagernd」に代わった。それらのドイツ語訳は定着し、現在まで使われている。

しかし最近の20年を見ると、このようなドイツ語化は台無しにされたという批判が起こっている。たしかに、現在のドイツ鉄道株式会社は様々な用語を英語で表現するようになった。それは例えば「Service-Point」、「Inter City-Night」のような、英語としてそのまま存在しない造語もある。そして「Bahn Card」や「Autoshuttle」のようなドイツ語と英語の混合語もある。

フランス語に由来する外来語は19世紀に分かりやすくするためにあえてドイツ語に訳されたのに、20世紀末になってなぜまた英語に変化されたのか。その問いに、そう簡単に答えは見つ

かりそうにない。

外来語とは何か

ドイツ語で外来語 (Fremdwort) という概念をどのように定義すればよいのか。ドイツ語化を促進しようとした者は、ゲルマン語由来のことばだけをドイツ語として認めた。国語浄化論者は、ずっと以前にドイツ語に流入して、すでにドイツ語の環境に順応した外来語さえもドイツ語化しようとした。ローマの石造建築方法が知られるにつれて、ラテン語の建築用語が中部ヨーロッパに入ってきて古高ドイツ語の時代から根付いた。例えば「Fenster (窓)」、「Kammer (小部屋)」、「Keller (地下室)」、「Mauer (壁)」、「Pfeiler (支柱)」など (ラテン語の fenestra, camera, cellarium, murus, pilarium) があった。500年以上の時を経て、それらの用語は一般によく使われているドイツ語のことばになってきた。国語浄化論者はそれらのことばさえもドイツ語化しようとした。時にはゲルマン語由来の単語であっても、外来語であると誤解される場合もあった。例えば「Nase (鼻)」ということばはラテン語の「nasus」に似ているので、ゲルマン語でないと決め付けられた。しかし、インドゲルマン語族の中でドイツ語とラテン語は親戚関係があるという事実が見落とされていた。このように語源を探る際には、誤りを犯す事が多い。19、20世紀の国語浄化論者は誤りを犯す危険があっても、あくまでも単語の由来しか考慮しなかった。外来語がドイツ語の造語規則に従って順応してきたかどうか、使う人にとってドイツ語そのものとして認識され、親しんできたかどうかという事実が完全に無視されていた⁵⁾。

語源を探る難しさがあるという理由もあるが、言語学者にとって、外来語という概念を定義するのは非常に困難である。言語の接触によることばの借用の経過全体を考慮せずに定義するのは不可能であろう。ドイツ語は2000年以上前から外来語の影響を受容している言語である。つまり、ドイツ語はフランス語や英語と似たように混成語であり、現在使われている語彙の80%は外国語を語源とするものである⁶⁾。そして、その外来語は様々な言語から流入した。例えば「Alkohol (アルコール)」はアラビア語、「Tomate (トマト)」はアステカ語、「Tee (茶)」は中国語、「Anorak (アノラック)」はエスキモー語、「Samstag (土曜日)」はヘブライ語、「Hai (鯨)」はアイスランド語、「Kiosk (キオスク)」はペルシャ語、「Schmetterling (蝶)」はチェコ語、「Joghurt (ヨーグルト)」はトルコ語、「Kutsche (馬車)」はハンガリー語から由来している。そして、ドイツ語を母語として話す多くの者はそれらの単語が外来語であることを意識していない。

それにもかかわらず、Dieter E. Zimmerというドイツの作家 (1934年生まれ) はドイツ語圏の中の外来語について次のようなことを確認した。氏によると、ドイツ語圏では多くのことばが一般の語彙から除外され、いつまでも外来語 (Fremdwort) として認識され、扱われている。それを証明するために、最も大きいドイツ語辞典 (Brockhaus Wahrig) の検索語数を最も大きい英語辞典 (Webster III) と比較した。前者が220.000語であるのに対し、後者はその倍以上、460.000語もある。Zimmerによると、その理由は語彙の広さではない。むしろ、ドイツ語圏では多くの単語がドイツ語辞典に載らず、外来語辞典に記載されている。そして、ドイツ語圏では他語圏と比べ物にならないぐらい外来語辞典の種類が多いと強調している。

つまり、ドイツ語の中には、すでに外来語であることが分からないぐらいドイツ語として市民権を得たことばもあり、同時に外来語として扱われていることばもある。それは、ドイツ語圏では外来語を定義することが非常に困難であることを証明している。

言語学と無関係の一般の人は専門家とまったく異なる判定基準で「外来語」(Fremdwort)や「ドイツ語」(deutsches Wort)を区別し、この二つだけの部類に類別することに抵抗がない。区別基準は語源でなく、ことばとの親密さの度合いである。親しさを感じないことばはドイツ語源であっても、外来語として認識されることもある。このような混乱があるので、「Fremdwort」という専門用語は、使用できなくなった、「Fremdwort」というものは実際に存在していない、と言う言語学者もいる。しかし、このテーマに取り組む多くの言語学者は現在に至るまで外来語や土着語の差を明確にし、細かい類別を浮き彫りにしようとした⁷⁾。

Klaus Hellerという言語学者は、ことばの定着(Domestikation)を考察する際、二つの要素を区別している。それはことばの意味論・文体上の適合(Integration)、もう一つが形式上の同化(Assimilation)である。あることばが、その由来語の中で様々な意味を持っているとして、(少なくともその一つの意味で)外来語として他の言語に流入し、借用されると、Integrationが起る。例えばラテン語由来の「nota」は様々な言語に流入した。ドイツ語の「Note」は現在六つの意味⁸⁾があるが、英語では「評価」や「楽譜」に別の単語がある。「note」はその二つの意味としての必要がなかったため、受け取られなかった。ロシア語でも、その外来語にはドイツ語より意味が少ない。このように、一つのことばが流入する場合、意味論の適合が受容語によって異なっている。Integrationに関してもう一つ重要な点がある。外来語は受容語の意味論上の構造の空白を埋めるのが理想である。つまり既に存在していることばが有しない意味論・文体上の機能を持つことが好条件である。もう既にその機能をはたしている単語があれば、その外来語とそれに対応している土着語との間に競争が生まれる。Hellerの主張をまとめると、借用語の意味論・文体上の機能(意味)が対応している、既に存在している名称のそれと、はっきりとした差があればあるほど、そのことばの適合が完全になる。

流入語の形式上の同化(Assimilation)はIntegrationと同時に、またはそれに続いて発生する。Assimilationはことばの発音、書き方、その語形論(各変化、数変化、性)や語構成に関わる。例えば、ドイツ語に流入することばの発音は、ドイツ語の調音に合わせられる。書き方に関しても、外来語の語記素はドイツ語の語記素に交換される。動詞にはドイツ語の動詞の不定詞語尾や人称語尾、名詞に性がつけられる。そして名詞の頭文字は大文字で書かれる。このように、外来語はドイツ語に合わせられる⁹⁾。

外来語がドイツ語の語彙に流入して、意味論・文体上の適合や形式上の同化が発生すれば、その外来語は借用語からドイツ語に変化するので、「外来語」(Fremdwort)という用語が不必要である、と論じる言語学者がいる。「Fremdwort」は実際に融通のきかない、静止した概念でありながら、感情的判断基準も背負っているといえる。しかし、Hellerはその用語の維持を要求している。氏はことばの由来を探る共時的分析(diachronische Analyse)、そして形式上・構造上の特徴を探る通時的分析(synchronische Analyse)による次のような部類区別を提案している。

(1) 共時的分析も通時的分析も他の言語の由来を指示しない場合、そのことばは「土着語」

(heimisches Wort) である。(2) 由来はドイツ語であっても形式上・構造上の特徴が外来語を示せば、そのことばを「偽外来語」(Pseudo-Fremdwort) と名づける¹⁰⁾。(3) その逆に由来が外来語であることを示しながら、形式上・構造上の特徴がドイツ語であると証明できれば、そのことばは「借用語」(Lehnwort) である。(4) そして「外来語」(Fremdwort) の場合に、共時的分析も通時的分析も外来語の由来を明示する¹¹⁾。このような区別は非常に有意義であると思われるが、はっきりと区別できない、断定できないことばもある。

では、日本語の場合に外来語はどのように定義できるだろうか。英語のドイツ語の中への入り込み方と、日本語の中への入り込み方とはどこが異なっているだろう。日本語の中の外来語数はドイツ語のそれと比べて、引けをとらないと考えられる。漢字と共に日本語になってきた中国のことばもあり、遠い過去に流入して現在では外来語として認識しないもの、例えばフランス語由来の「ズボン」やペルシャ語由来の「イチジク」などもある。このようなことばは語源から判断すれば外来語であるが、日本人には外来語という意識の外にある。言語政策の専門家である山田雄一郎は『外来語の社会学』の中で外来語の定義からそのようなことばを除外し、外来語を次のように定義する。「通常カタカナ書きされ、かつ、われわれが外来のものとして日常的に意識する、あるいは意識できる言葉」¹²⁾。つまりドイツ語の場合と似たように、既に定着した、一般の人に外来語として意識されていない外来語は問題にされていない。

山田はさらに、言語ごとに細かい違いがあっても、外国語の受け入れ方をおおよそ二通りに区別する。一つは「ドイツ語の中の英語のように、外国語を適当に加工し、そのまま用いる場合である。これを直接借用型と呼ぶなら、現在の日本語は、概ねこの方法に従っている。もう一つは、自言語に翻訳して取り込むもので、フランス語の対応が典型的である。これを仮に翻訳借用語型と呼ぶ」¹³⁾。日本は以前から直接借用語だったのではない。明治時代には外国との交流が増加し、とりわけ西洋からの数多くの新しい概念を取り入れる必要があった。それらの概念を表現するための日本語のことばがなかったため、日本語に訳さなければならなかった。例えば「社会」、「自然」や「自由」はその頃の造語である。しかし大正時代からはこのような翻訳借用語は徐々に衰退し、現在完全にカタカナの直接借用語に推移してきた。

ドイツ語にも例えば「Eisenbahn (鉄道)」のような翻訳借用語がある。それは最近のものではなく、19世紀に造られたことばである。今日でも翻訳借用語を造語し、普及させようとする動きは稀に見られる。例として英語のコンピューター用語である「download」や「notebook」が挙げられる。それらをドイツ語に訳せば「herunterladen」や「Klapprechner」となるが、定着しにくく、一般的に受け入れられるところまでは行かない。

外来語流入の現状

以下に、日本語と比較しながらドイツ語への外来語の流入の現状を検討する。日本語もドイツ語も昔から外国語の流入がある。それは概ね言語の自然の発展のように、一般に意識されなかったに違いない。外来語の流入は近頃何故問題にされているのだろうか。外来語の受け入れをテーマにしている専門家によると、昔の状況は今日の状況とまったく異なると主張している。日本語およびドイツ語の場合の論証を比較する。

山田雄一郎によると、「外来語は、異質の世界、非日常の世界への入り口として、われわれの生活に小さな緊張と彩りを添えていた。外来語のもつ知的な気取りは、日常の中のささやかな非日常的仕掛けであった」。しかしながら、「現代の日本人は、不感症とは言わないまでも、外来語に対してあきらかに鈍感になっている。外来語が大衆化したせいである」¹⁴⁾。このような傾向は世界中の様々な言語にも見られるが、ドイツ語の場合にも当てはまる。外来語の過度の流入を非難している言語学者以外、ドイツ語を母語として使っている者にとっては、新しい外来語との遭遇が日常茶飯事である。ドイツ語の場合でも日本語の場合でも、現在に受け入れられる外来語の大多数は英語からの流入である。つまり両語圏でも英語の外来語が大衆化している。そして、このような英語のことばの過度な流入の責任者を特定する際は、両方の場合も新聞、テレビなどのマスメディアのせいにすることが多い。インターネットやグローバルゼーションなどもこの関連で挙げられるキーワードになっている。

今日の外来語の流れ込み方を評価するには、次の次元に分けて考察を進める。それは量・速度・範囲の三つである。量を見れば、既に述べたように、現在の日本語と同じく、ドイツ語に流入している外来語は、以前の何倍にも増加した。Broder Carstensenの調査によると、ドイツの新聞に登場した英語のことばは、1980年から1990年の10年間で、5倍に増えた¹⁵⁾。日本語の場合、外来語の持つ響きは外国への憧れを動きかけている。その憧れ、特にアメリカ文化への憧れ、そして英語の誘惑的な響きやアルファベットの格好良さを求める日本人が増えているので、外来語の流入も増加するとされている¹⁶⁾。ドイツ語を母語として使っている人にとっても、英語への憧れがある。日本人にとっては、英語を国語とするアメリカの文化は、遠くてエキゾチックな世界である。ヨーロッパ人にとって、同じ文化圏であるとされているアメリカは、それほどエキゾチックでない。ドイツ語から見ても英語がそれほど離れている言語でないにもかかわらず、ドイツ語圏の人々は、英語の誘惑的な響きやイメージに憧れがあり、英語を多く受け入れる。ドイツでも日本でも外来語が多く受け入れられる一方で外来語に対する興奮がなくなり、人は鈍感になってきたとも言われている。それは中毒のような現象であるかも知れない。例えば、ドイツで「Jogging」という英単語が流入した時は、「お洒落」なイメージがあったが、現在そのことばが大衆化したせいでそういったイメージがないに等しくなった。新しい外来語の流入に対して鈍感になってきたので、外来語を軽い気持ちで積極的に受け入れるが、多くの外来語は熱が冷めてしまえば定着せずに使い捨てにされる。このように、母語だけではなく外来語を粗末に扱う状況は言語意識の危機として捉えることができる。

速度の観点からは、過去に外来語の受け入れがゆっくりとした、段階を追った過程であった。今日では息を呑むほどの速さで、世の中の様々な分野が複雑に絡みあい進化を遂げている。国家レベルではイデオロギー的に克服できない境があっても、情報や商品の流れを阻止できないほどの速度で発展している。このような状況の中で、外来語の侵入も促進されている。ゆっくり順応する余裕はない。意味論・文体上の適合、そして形式上の同化のための時間がないので、その新しい外来語を使おうとする際、混乱が起こりやすい。例えばコンピューター用語の「ダウンロードした」(日本語でも英語を使う!)はドイツ語で「downgeloaded」という過去分詞になる。英語の動詞をドイツ語の分離動詞として利用し、分離動詞に特有の「-ge-」が挟まれるが、語尾はまた英語の「-ed」がつけられる。このようなハイブリッドのことばが文体上き

れいであるかどうかという判断は、趣味の問題であるが、急に作られたことばである感じがし、ぎこちない雰囲気がある。

範囲で言えば、以前の外国語の流入は特定の分野に限定されていた。ドイツ語圏ではラテン語やギリシア語は大体学問の語彙にしか影響を与えなかった。フランス語は郵便制度、鉄道や軍隊に影響を与えただけでなく、貴族やブルジョアにも受け入れられ、上流階層の言葉であった。商人や音楽家はイタリア語の借用語を用いた。しかし、現在の外国語の侵入は分野を越えている。様々な科学分野、取り分け自然科学、コンピューター分野、観光・交通、経済、広告・宣伝、ファッション・ポップ音楽などという分野では、Funktionswort（機能を持っていることば）以外、多くの概念が英語源の外来語である¹⁷⁾。幾つかの分野は若者と関連しているので、英語風のドイツ語が若者にとって当たり前のことであり、英語化 (Anglisierung) を吸収する。学校教育でも英語の流入に対する防護的意識、ドイツ語に対する言語意識は育てられる事がなく、母語を尊敬する意識がまだ発達していない若者が英語の外来語を無防備に受け入れる一方である。

日本でも、生活は外来語抜きでは考えられない。テレビ、新聞などのメディアの世界を始め、生活全体の隅々まで、外来語、とりわけ英語源の借用語が溢れている。しかし状況は多少ドイツとは異なっている。ドイツ語にとって英語は西洋の言語として同族の言語であるので、侵入する英語源のことばの意味が多くの場合、すぐに理解される。しかし日本語に受け入れられる英語のことばは山田雄一郎によると、「徹底的に日本語の洗礼を受ける。発音や意味はもちろん、品詞や語法までも、もとの姿が想像できないほどに変わることもある」。例として、「ユビキタス」が挙げられる。そこからもとの英語の綴り (ubiquitous) を連想することは困難であると考えられる。更に、「ユビキタス」という外来語は一部の少数の人々の間でしか使われない。山田はこのような現在の日本の外来語事情を「コミュニケーションの隠語化」と名づけている¹⁸⁾。

外来語受け入れの動機

不明瞭なことばを使うのは不便であるのに、何故日本で外来語はそんなに増加しているのだろうか。山田雄一郎によると、「外来語の場合、冒険心や気取りが理屈をおさえつけてしまう」¹⁹⁾。

ドイツ語圏では英語を語源とする外来語の受け入れの動機として四つが考えられる。そのうちの二つは客観的な動機であり、他の二つの動機は主観的なものである。客観的動機と言えば、必要性や便宜性が挙げられる。次から次へ新しいものや発明品が現れ、それらを名づけるための適切なドイツ語のことばがない場合、ぴったりした英語の表現が既に存在していれば、それを使うのが手っ取り早い (例えば「Computer」)。また、ドイツ語で相当する表現があっても、英語のことばは多くの場合もっと短くて、的確で、簡潔な表現として便利である。例えば、英語源の「Stress (ストレス)」がドイツ語の「Anstrengung」より、「Campus」が「Hochschulgelände」より確実に短くて使いやすいためである。しかし、ドイツ語のことばを英語の表現に置き換える傾向が度を過ぎているという批判が最近多くなってきた。確かに「Kind (子供)」が何故英語の「Kid」に交換されるか、その理由ははっきりしていない。

主観的な動機の一つはアメリカ文化の指導的な役割に関連している。その文化のイメージと

は現代的・ダイナミック・若い・粋・精力的・セクシーなどであるので、アメリカのこともこのようなイメージを伝える²⁰⁾。例えば「Bike (自転車)」は「Fahrrad」よりお洒落な雰囲気がある。「Jogging wear (ジョギング・ウェア)」は「Dauerlauf-Kleidung」よりダイナミックに聞こえる。英語の名前を持っている商品はドイツ語の名前の付いたものより市場で成功し、金儲けの種になる²¹⁾。

もう一つ主観的な動機としてドイツの所謂アイデンティティの危機 (Identitätskrise) を挙げることができる。統計的に把握できない現象であるが、第2次世界大戦後に政治的意識を得た世代の多くのドイツ人はナチスの犯罪に責任を感じ、ドイツ人であることを恥ずかしく思っている。それと共に、ドイツ語を否定する傾向もあるので²²⁾、英語源の外来語は歓迎されていて、外来語の流入を批判することが政治的に偏った行為と取られることもある。

日本ではドイツのようなアイデンティティの危機はない。しかし、ドイツ語圏と同様に外来語の名前をもっている商品はより「お洒落」である。そして、日本語でも場合によって外来語を使う必要がある。例えば「コンピューター」や「インターネット」のようなことばに相当する日本語のことばがない。しかしドイツ語と違って、英語源の外来語は日本語のことばより短くて、便利、使いやすい、ということが殆どない。にもかかわらず日本人は時々、分かりにくい外来語を優先する。例えば、「安全」より「セキュリティ」、「台所」より「キッチン」などである。分かりにくさという不利を我慢して、洒落た、現代的な雰囲気のある外来語が優先される。あるスポーツクラブは「サマー化けーション」ということばで広告を出していた。このように、日本では外来語をそのまま使うだけでなく、日本語のことばと混ぜあったイメージで使用する。チラシによると、個人にぴったりのプログラムが提案され、「新しいカラダを効率よく手に入れる。それはもはや生まれ変わるといふより“化ける”といったほうが近い」と言うように説明されている。そして外来語は識別できないくらい略されることも多い。例えば「ambivalence」が「アンビバ」に、「entertainment」は「エンタメ」になって、語源をたどることが殆どできない。例えば「bi」そして「va」は日本語で同じく「ビ」や「バ」になる。英語の音を表現することにカタカナでは限界があるにもかかわらず、カタカナで書かれる英語源の外来語が溢れている。

このように、ドイツでも日本でも英語の外来語を使うような国独自の動機はあるが、外からの影響力もある。一つ重大な要因は英語の決定的・支配的役割である。強い種族（この場合は英語圏）の言語には強い影響力がある²³⁾。事実、英語は現在世界で最も広く普及し、最も多く利用されている言語であり、共通語になっている。それと関連して、80年代から「言語帝国主義」という概念が広まっている²⁴⁾。英語のこのような影響の下に、英語源のことばが他の言語に数多く流れ込むのは必然であろう。

以上で明らかになったように、英語のことばを受け入れるのに、日本・ドイツや他の国に共通の動機がありながら、国によって多少異なっている。しかし、それは結局流れ込んで来る英語のことばの数にそれほど反映していない。徹底して英語の流入を制限しないかぎり、英語は止め処なく侵入してくるのである。

英語の流入を法律によって制限したのは、例えばフランスである。70年代に、ドイツ語のDenglischと同様に、フランス語の場合にもFranglaisが増加した。Franglaisというのは英語の

ことばや表現を取り入れたフランス語と定義されている²⁵⁾。英語の影響に対する非難や心配が高まったので、英語の侵入からフランス語を守るために、フランス議会は1994年に「フランス語使用法」(トゥーボン法, Loi Toubon²⁶⁾)を制定した。法案の内容によって、行政機関など公的機関でのフランス語の使用を義務付けると同時に、外国語放送は全体の4割未満に制限すること(例えば、ラジオやテレビなどでフランス語以外の歌詞で歌われる楽曲の制限)など。違反者には罰則が課せられる。フランス語使用の義務化を公共の場だけではなく、民間レベルの商工関係、ラジオ・テレビの広告にまで適用させる。このように、例えばコンピューター、ファーストフードなどはフランス語の「ordinateur」や「restaurant rapide」に置き換えられ、その使用が義務付けられた。この法律はあまりにも厳しかったので、一部修正された。確かにフランスには他の国と比べて英語の影響力がそれほど強くない。しかし、フランスでも近頃、フランス語が国民生活の様々な分野で英語、特にアメリカ英語に侵食されている、という非難も多くなってきた²⁷⁾。従って、英語を抑制したり抑圧したりするような法律や対策によってでも英語の流入を完全に阻止することは不可能である。

賛成の声 — 反対の声

ドイツでは、ADSVに由来する、1946年に設立したGesellschaft für deutsche Sprache (ドイツ語協会, 略GfdS), そしてVerein deutsche Sprache e.V. (ドイツ語登録団体, 略VDS)の二つの機関がある。それらの機関の目的として、英語によるドイツ語への影響を批判し、ドイツ語を保護することなどが挙げられる。GfdSは前身のADSVと異なり、現在国粋主義的な傾向がないとされている。GfdSはドイツにおける最も古い、最も重要な言語保護機関であると自称し、ドイツ連邦政府の支援を受けている。その任務はドイツ語に対する意識を公衆レベルで深めることである。活動の中心は言語相談、例えば法律文書の内容の点検などである。VDSは1997年に設立され、伝統がない。自称市民運動として、GfdSより活発に活動している。英語の影響に反対しているVDSの論証はかなり極端であるが、その論証の要点を幾つか紹介する。VDSの言語政策は次の論点に基づく。ヨーロッパの言語はグローバリゼーションの圧力にさらされ、特に英語系アメリカの言語や文化の影響が増加し、その影響を受ける言語の重要性が衰えつつある。その結果として、その国民の独自性が失われる。とりわけドイツ語圏の諸国にはアメリカ化(Amerikanisierung)や英語風化(Anglisierung)が特に顕著である。英米のことばや言い回しの利用が増加し、ドイツ語は昔のラテン語やフランス語の影響下にあった時代と比べて、その状況が急変している。様々な学問分野でドイツ語が英語の表現に取って代われ、ドイツ語は学問上の複雑で厳密な実情を表現する能力を喪失している。したがってVDSは学者、政治家、ジャーナリスト、作家、教師、役所、会社、消費者団体などに、ドイツ語を保護するように、英語風のことばや表現の利用を制限するように訴えている²⁸⁾。

また、VDSはその出版物の中で英語流入に賛成の論証に対する反論も行っている。それらすべての論点を挙げることはここでの範囲を超えるが、幾つかの点をまとめる²⁹⁾。

英語が未来の言語として、世界平和への鍵であり、Denglischはその第一歩である。しかし、反対している者によると、言語の多様性があっても、国際間の協調が可能である。

賛成者によると、英語は理想的な世界言語である。学問分野の間のコミュニケーションは英語なしに成り立たない。もし、ヨーロッパで英語だけを使えばEUは世界経済的に優位になれる。それに反対している者によると、学者は自分の母語や専門英語以外に少なくとも2、3ヶ国語に堪能でないと、厳密な知識を伝えるのが不可能になり、学者として失格である。そして言語はコミュニケーションのためだけでなく、独自性を確保し、言語や文化の多様性やそれに基づく交流による認識を得るためにある。

賛成者は、Denglischによって英語により早く堪能になりうる、と主張している。反論者によると、英語のことばをドイツ語の中に入れることは英語習得とは無関係である。Denglischは正しい英語ではなく、多くの場合間違ったドイツ風英語であるので、英語に対する言語感覚や正しい英語に対する敬意を失わせることになる。

ドイツ語の中で使われている流行の英語のことばは、他のヨーロッパの言語の中と比較すれば、数の上、あまり変わらないという説もあった。VDSはその説が誤りであると主張している。(正確な統計は記載されていないが)ドイツ語はヨーロッパの言語の中で、英語のことばを最も使う言語であると言われている³⁰⁾。

Denglischの賛成者によると、ドイツ語の純粹さを守ろうとしている者は右翼寄りでドイツ心酔者である、という偏見に満ちた非難まである。それに反論する者は、フランスやスペインなど他のヨーロッパの国との比較を勧める。それらの国では、言語保護を国粋主義や右翼傾向と同一視していない。つまり、ドイツ語を守ろうとする人に右翼的な趣向があると決め付けるのは根も葉もないことである、と主張している。

このように、感情的な論争が多く、必ずしも客観的な討論ではない。そして、言語に関する問題を政治と切り離して考えるのは不可能であることも明らかである。

もう一つ重大な論点は、言語が生きているかどうか、有機的かどうか、という問題である。言語が生体である、という主張は常套句にすぎないと強調する言語学者もいる。彼らによると、言語は人間の創作物である³¹⁾。それでは言語の発展を促す主体はどこにあるだろう。エリートか一般市民か、権力者あるいは出版社なのか。それとも、言語の発展や変化を決定付ける特定の主体はいないのか。言語を指揮することはできないが、結局言語を左右するもっとも強い勢力はメディアにある、という意見が広く認められている。それに対して、多くの言語学者は自身が言語の発展に影響を与えることが出来ないという考え方を持っている。そして、ドイツ語の将来について聞かれると、彼らは現状にだけ焦点を合わせるので、将来についての仮説を立てない³²⁾。

おわりに ー ドイツ語は苦境に陥っているか

言語の歴史を探れば明らかになってきたように、言語は語彙に関して他の言語の影響を受けやすいが、形態上(Syntax)や統語上(Morphologie)耐性がある³³⁾。従って、現在の英語による強い影響を判断すれば、ドイツ語全体ではなく、ドイツ語の語彙だけが危機に陥っていると見える。こうした意見を持っている言語学者や語学者は多い³⁴⁾。しかし、ドイツ語は英語に引き継がれ、多くの学問分野から退く事実がある。そして、英語は語彙上の侵略によって幾つか

の言語を取って代わった証拠もある。例えば、カンブリア語や多くの北米インディアン言語、オーストラリア先住民族の多くの言語などが挙げられる。ゲール語、ウェールズ語など幾つかの言語は英語に攻められ生存競争の中にある³⁵⁾。ドイツ語はまだこのような危機にさらされていないが、将来にドイツ語の生存が苦境に陥る可能性がないとは言い切れない。

さて、ドイツ語に関係する言語学者の間でよく取り上げられる話題であるが、英語の外来語が溢れているドイツ語の現状は、ドイツ語を外国語として学んでいる人の勉強意欲にどのような影響を及ぼしているだろうか。以前まで世界中に広まっていたドイツ語の名声は、ドイツ語を母語とする人々自らが招いた弱体化に陥っているので、ドイツ語を学ぼうと決心する人が減少しつつあるのは不思議ではない。基礎的なドイツ語教科書では英語のことばを避けているが、中級や上級の教科書には「普通」のドイツ語で書かれた文章が含まれる。ドイツ語を学んでいる人はドイツ語の中に氾濫する英語のことばの多さに驚くだろう。ドイツ人が自分の言語を誇めようとしている、という印象を受けかねないので、英語を母語として話している人を始め、ドイツ語学習者はドイツ語に失望し、勉強意欲が減退する可能性も高い³⁶⁾。

では、その危機を防ぐために、どのような言語対応策を打ち出すことが必要であろうか。フランスのように、法律による制限がドイツでも可能なのだろうか。これらのような問いは現在頻繁に取り上げられているが、解決への糸口はまだ見えていない。言語学者は、ドイツのこれまでの言語政策の不実行によってドイツ語の威信や名声が衰えた、と訴えている。ドイツ語はヨーロッパの中で、最も大きい母語、そして第二言語として英語に次ぐ地位にあるにもかかわらず、ヨーロッパの政治・経済・文化などの交流で使われる言語として、未だ英語やフランス語と肩を並べる事ができない。

言語学者David Crystalによると、ある国や民族の社会は変われば言語も変わる³⁷⁾。従って現在のドイツ語における変化は社会の変化を反映している。ドイツ語の現状に不満や心配を抱けば、まず社会の状態を考察する必要がある。そうすれば、何故ドイツ人は英語の外来語に、つまりDenglischに抵抗力がないか、何故Denglischを喜んで使うようになってきたか、明らかになる。VDSの論証を借りれば³⁸⁾、ドイツ語圏の人は言語に対して怠惰になっている。外から侵入する外来語に適切なドイツ語訳を探るのを面倒がって、輸入されたことばをそのまま使ってしまう傾向が強い。その上、人々はわざと多くの英語のことばを使うことによって、自分が流行に乗っている、クールであると考えようになった。現在の英語風のことばの供給過多から判断すれば、我々の言語に対する態度に問題があることは明白である。

結論として、ドイツ語圏の中で一般的に言語意識が衰えている。その衰退の原因を遡れば学校教育の制度にも問題があるように思われる。よって、ドイツ語圏の人々がDenglischに代表される言語意識の危機からドイツ語を守るには、言語保護・言語教養やドイツ語に対する尊敬の意識を養う言語政策が必要になる。それは教育政策から出発すべきである。

注

- 1) Dieter E. Zimmer, *Deutsch und anders. Die Sprache im Modernisierungsfieber*, Hamburg 1997, 9頁。
- 2) Zimmer 13頁。
- 3) „Der Führer wünscht nicht derartige gewaltsame Eindeutschungen“. Peter von Polenz, *Sprachpurismus*

- und Nationalsozialismus*, 1967. Zimmer 13頁。
- 4) Zimmer 14頁。
 - 5) Zimmer 15頁。
 - 6) Klaus Heller, *Der Einfluss der Sprachen aufeinander*, 185頁 (Rudolf Hoberg, ed., *Deutsch – Englisch – Europäisch, Impulse für eine neue Sprachpolitik*, Mannheim 2002)。
 - 7) Heller 184頁。
 - 8) それらの意味は「紙幣」, 「注」, 「評価」, 「覚え書」, 「特徴」, 「音符」, その複数として「楽譜」である。
 - 9) Heller 186 – 192頁。
 - 10) 「Handy (携帯電話)」はその例として挙げられる。
 - 11) Heller 196頁。
 - 12) 山田雄一郎「外来語の社会学 – 隠語化するコミュニケーション –」春風社2005年, 8頁。
 - 13) 山田雄一郎 61頁。
 - 14) 山田雄一郎 8 – 9頁。
 - 15) David Crystal, *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*, Cambridge University Press 1995年, 114頁。山田雄一郎 27頁参照。
 - 16) 山田雄一郎 64頁。
 - 17) Zimmer 20頁。
 - 18) 山田雄一郎 11頁, 25頁。
 - 19) 山田雄一郎 58頁。
 - 20) Zimmer 28頁。
 - 21) Bastian Sick, *Der Dativ ist dem Genitiv sein Tod, Folge 3*, Köln 2006, 89頁。
 - 22) Armin Burkhardt, *Die “schreckliche” deutsche Sprache im Spiegel literarischer (Vor-) urteile* (Hoberg 2002)。
 - 23) Heller 185頁。
 - 24) Robert Phillipson, *Linguistic Imperialism*, Oxford University Press 1992。
 - 25) 山田雄一郎 32 – 33頁。
 - 26) 名称は当時の文化大臣ジャック・トゥーボン (Jacques Toubon) に由来する。
 - 27) Albert Salon, *Die Sprachenfrage in der EU aus französischer Sicht*, 335頁 (Hoberg 2002)。
 - 28) Herrmann Zabel (ed.), *Denglisch, nein danke!* Paderborn 2003, 347 – 352頁。
 - 29) 賛成の論点や反対の論点を対照的に取り上げている著作がある。Herrmann H. Dieter und Gerd Schrammen, *Reden und Widerreden, Argumente für die deutsche Sprache*, Paderborn 2005。
 - 30) Dieter und Schrammen 75頁。
 - 31) Dieter und Schrammen 80頁。
 - 32) Hans-Martin Gauger, *Die Hilflosigkeit der Sprachwissenschaft*, 91頁, 95頁 (Christian Meier, *Sprache in Not? Zur Lage des heutigen Deutsch*, Goettingen 1999)。
 - 33) Hans-Martin Gauger 91頁。
 - 34) 例えば Dirk Hofmann, *Do you understand Denglisch? Eine Umfrage zum Anglizismenverständnis*, 243頁 (Hoberg 2002)。
 - 35) David Crystal (1995) 114頁。
 - 36) Christian Meier 10頁。
 - 37) David Crystal, *The Cambridge Encyclopedia of Language*, Cambridge University Press 1997年, 5頁。
 - 38) Dieter und Schrammen 63頁, 106頁。